二〇一〇年一二月二二日（忘年会参加者一五名）

赤白の寄せ植ゑ園のクリスマス　ひかり
伴走は自転車の妻冬うらら　〃
撒き餌に狂喜乱舞や百合鴎　〃
ビルの間の日差一条冬運河　〃
街角はタイムトリップ社会鍋　菜々
イルミネーション消えて星空聖夜更く　〃
親鸞像笠を目深に木の葉雨　〃
ウインドーに銀色の靴クリスマス　うつぎ
銀杏落葉掃くは商社のニューフェース　〃
枯蓮の地獄に沈む一輪車　ぽんこ
大絵馬が裏に鎮座す年用意　〃
信号も聖夜の星のひとつかな　小袖
街師走路地あちこちに荷を下ろし　〃
大嘘視線を浴びる車内かな　百合
冬帝や芭蕉の句碑の凛として　〃
枯菊を焚きて入院待つばかり　きづな
ワゴンセールみな越境す年の市　〃
ごほうびに句帳いただくクリスマス　かれん
年暮るる廻せば軽き摩尼車　〃
目鼻消え阿弥陀様とや身にぞ入む　明日香
大楠の根方は石蕗の花明かり　わかば
辻一つ入れば下町おでん街　よし子
教会の小さき電飾クリスマス　せいじ
いてふ枯れきって空広ごりぬ御堂筋　はく子
数へ日のメモを片手に右往左往　満天
いそいそと納め句座へと街師走　〃
山茶花の散り敷く庭の句碑めぐる　〃
裸木のまとふ華燭の星づくし　〃

吟行句会みのる選

二〇一〇年一二月二二日（忘年会参加者一五名）